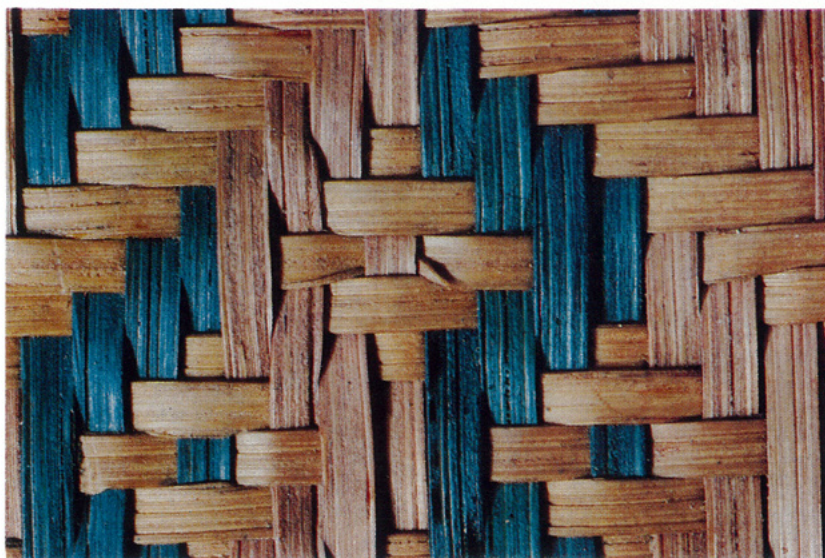
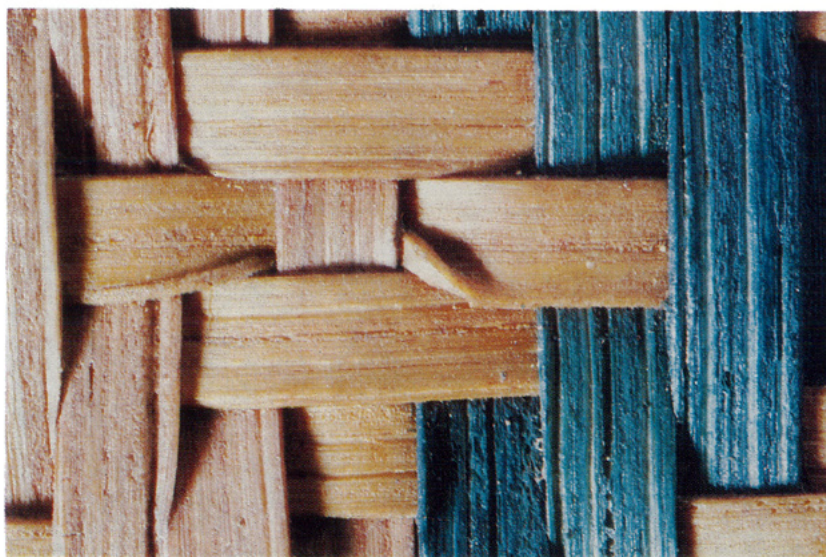




1 長側部分

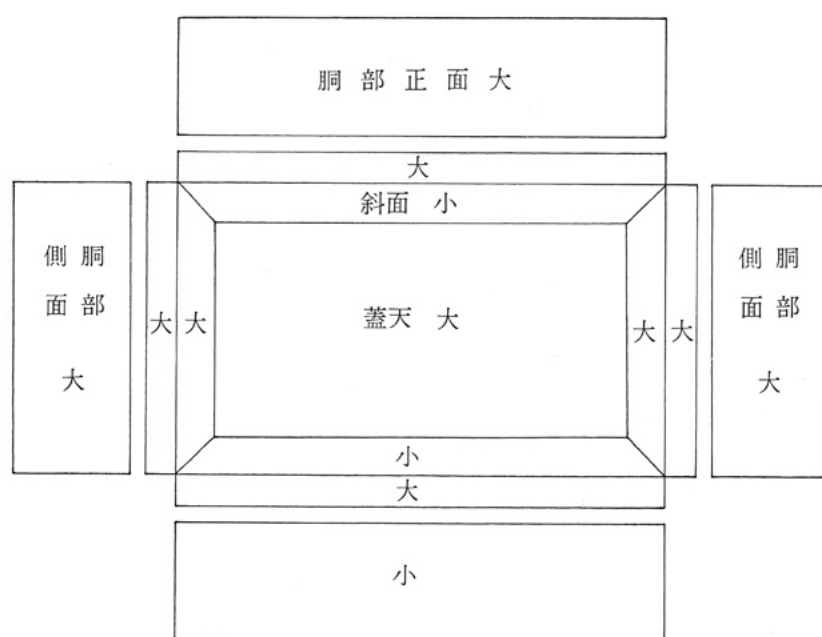
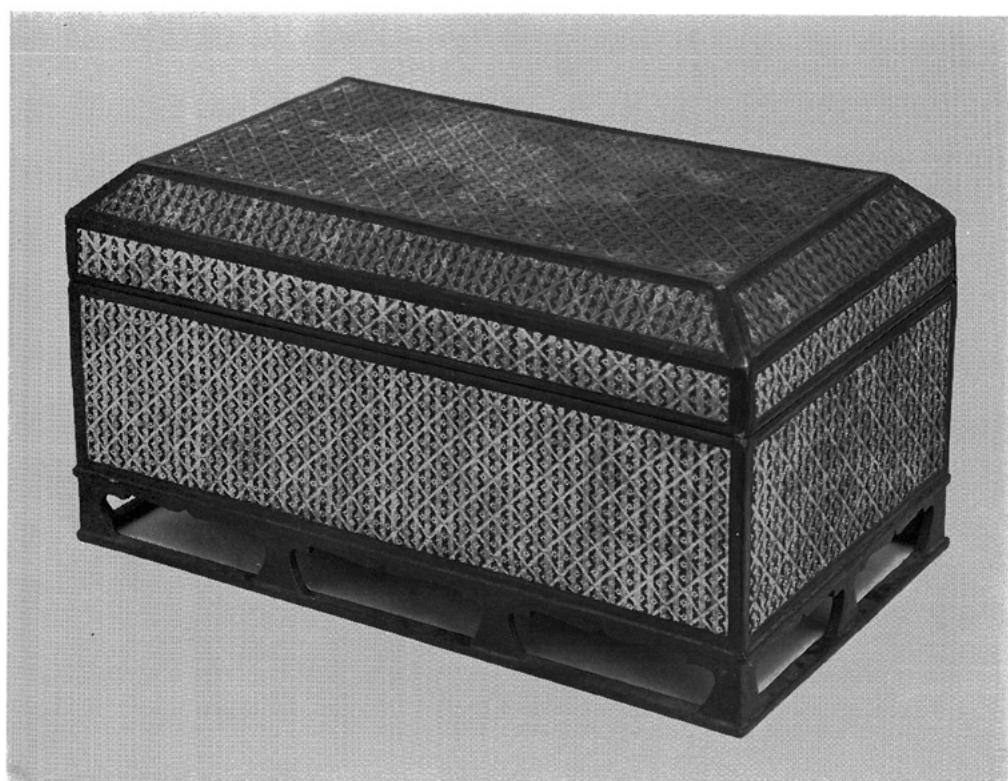
約5倍



2 上図中心部を拡大

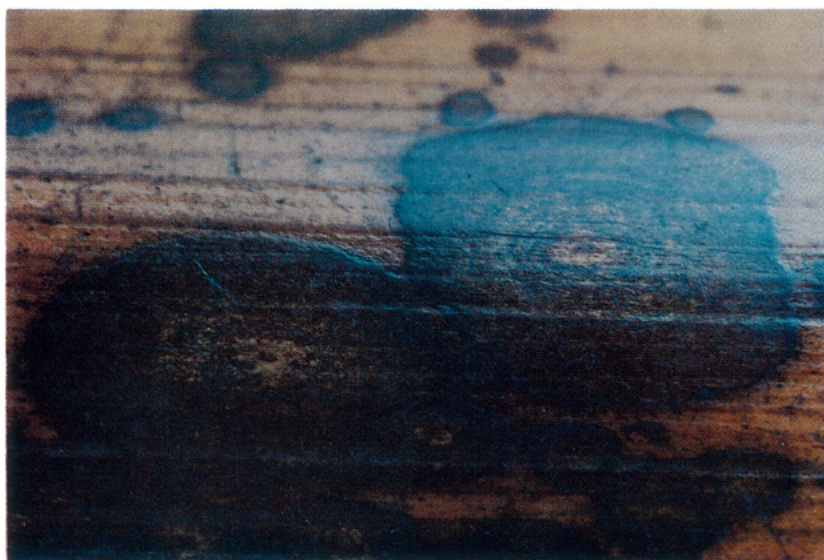
約12倍

双六局籠〔北倉37〕部分拡大写真



上図展開図 菱文様寸法 大、縦横各3.6cm
小、縦横各3.0cm

これまで竹編製といわれてきたが、図のようにしなやかな曲り具合が随所にみられ、籐であることが明らかになった(飯塚報告 本文29～30頁参照)



1 筆（梅羅竹管） 第一号〔中倉37〕

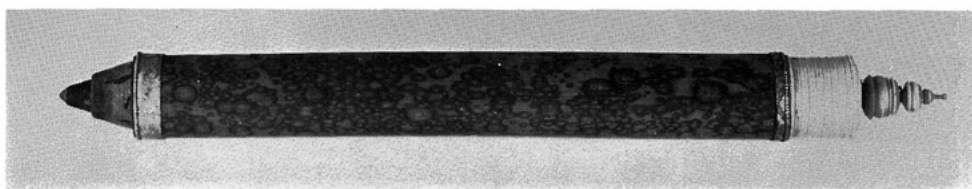
約8倍



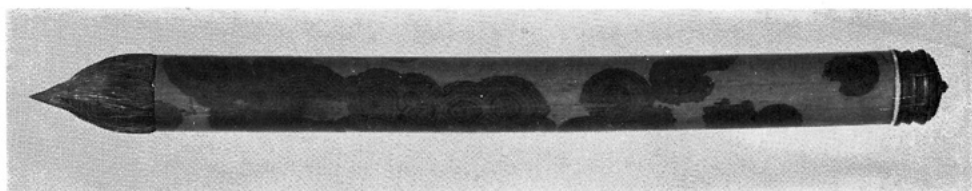
2 筆（斑竹管） 第五号〔中倉37〕

約8倍

筆管斑文拡大写真



筆（梅羅竹管） 第一号〔中倉37〕



筆（斑竹管） 第五号〔中倉37〕

筆管斑文拡大写真

（撮影 永嶋正春）

正倉院宝物中には竹稈を素材としたものが多いこととその利用範囲の広いことは本文中の飯塚・岡村両調査員の報告でも知ることが出来る。またその表面に褐色斑のあるいわゆる斑竹が奈良朝に於ても賞用されていたことは、上図の如き善美をつくした筆管に用いられていることから理解することが出来る。

岡村調査員の教示によれば、自然斑紋の生成の原因について二分するとすれば、竹自身の体内での何等かの物質交代の結果生じる生理紋と、特殊な菌が寄生して生じる紋、すなわち菌紋とに分けることが出来る。しかしここに示した図版のような菌紋の生成した竹の種類や菌の種類については、その実体を明らかにした書は未だ見ないということである。

さて斑紋の形状は様々であるが、各斑紋は中心点を持ち、同心円を描くように黒褐色の圈紋となっている。そしてそれらが近接していわば雲形を呈する雲紋にもなる。その斑紋の表面の様子は、周縁部よりやや膨れるものが一点あり（1図）、その他はほとんどが表皮より一段低くなっている（2図）。後者の場合、斑紋が途切れ不整形となる表皮の所々に褐色の点々が認められ、これをたどると圈紋の延長線上にあることがわかり、表皮の下には既にその文様が形成されているものと思われる。これら斑紋のある竹をその形状や大きさにより古人は梅羅竹、豹文竹などと呼び重用してきた。（木村法光）